

第7回国語分科会敬語小委員会・議事録(案)

平成18年5月29日(月)
午前10時～12時
古河総合ビル6階F1会議室

〔出席者〕

(委員) 阿刀田分科会長, 杉戸主査, 蒲谷副主査, 井田, 内田, 大原, 菊地, 小池,
坂本, 佐藤, 西原, 山内各委員(計12名)
(文部科学省・文化庁) 平林国語課長, 氏原主任国語調査官ほか関係官

〔配布資料〕

- 1 文化審議会国語分科会敬語小委員会委員名簿
- 2 文化審議会国語分科会敬語小委員会の議事の公開について(案)
- 3 第3章 具体的な問い案(たたき台)
- 4 第3章 具体的な問い—解説 案(たたき台)

〔参考資料〕

- 1 文化審議会国語分科会運営規則
- 2 文化審議会国語分科会の議事の公開について
- 3 文部科学大臣諮問(平成17年3月30日)

〔参考配布〕

- 1 今期国語分科会における検討スケジュール(たたき台)
- 2 敬語・漢字小委員会等の今後の日程について
- 3 敬語ワーキンググループの今後の日程について
- 4 『新聞と現代日本語』(金武伸弥 文春新書, 平成16年2月)

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認があった。
- 2 事務局から, 配布資料2「文化審議会国語分科会敬語小委員会の議事の公開について(案)」の説明があり, 了承された。
- 3 事務局から, 配布資料3及び4についての説明が行われた。説明に対する質疑応答の後, 配布資料3及び4に基づいて意見交換を行った。
- 4 次回の敬語小委員会は, 参考配布2にあるとおり, 7月27日(木)の午後2時から4時まで開催することが確認され, 会場については, 事務局から後日連絡することとされた。また, 第1章及び第2章の「たたき台」が出来上がったところで各委員に郵送し, 「たたき台」に対しての意見を寄せてもらうこととなった。
- 5 質疑応答及び意見交換における各委員の意見は次のとおりである。

○杉戸主査

ワーキンググループで作業を進めている側から補足いたしますと, 今, 氏原主任国語調査官から配布資料3についてはこの点, この点, 配布資料4についても, 同様にこの点, この点について御意見を申し上げますという御説明でしたが, それはこの先ワーキンググループで, 最初の日程の説明のように, 敬語小委員会が7月下旬に開かれるまで

の間に、全体としての素案をまとめなければいけない、そのときの基本的なことにかかわることだったと思います。この点はいかがでしょうか、この点はいかがでしょうか、そういうふうに挙げられた点は、この資料を作成していく上での基本的な方針と言いましようか、書きぶりに当たります。それをワーキンググループの方で作業を進める中で今までこちらがいいだろうか、そちらがいいだろうかといったところを、あるやり方でまとめて敬語小委員会にまず提案してみようというのが配布資料3、4です。

このほかにより良いまとめ方があれば頂きますが、ともあれ敬語小委員会でこういう線で行っていいんだ、こういう線でワーキンググループの案作りを最後まで進めるようにという、そういう御指示を頂ければ仕事がやりやすくなる。それに従ってやりたい。本日はそういう趣旨の会議かと思っています。そういうお願いの気持ちがあります。

○内田委員

先ほど阿刀田分科会長のお書きになった新書を頂きまして、読み始めたら思わず引き込まれて、ずっと読みそうになってしまったのですけれども、配布資料3、4の全体を拝見して、阿刀田分科会長の書き方とは違った形で、ある意味では端的に問題を焦点化させて、回答を出し、かつ背景、文脈のようなものを情報として与えるというのがこの資料の趣旨、本当にこういうものを作る上での大事な方針ではないかと思いました。

まず、問いの形を長くではなく端的にボールド(太字)にして、ポイントを分かりやすくして、問いをまとめていただく書きぶりは非常によろしいと思いました。それで、回答の仕方なんですけど、ただ読んでいくのではなくて、端的に答えているものを第1水準に置く。【問23】であれば、やはり「おじいさん・おばあさんではなくて祖父・祖母と呼ぶべきである」というふうに書き、その背景として少し長い解説を第2水準に加える。【問1】であれば、敬意の法則というようなものですね。相手の人との心的な距離を取るんだというのを第2水準の解説として持ってくる。第1水準には、敬語はどうして必要か、対人関係をどういふように書いたらいいか分かりませんが、スムーズにするためとか、気持ち良く対人関係を結ぶためとか、分かりませんが、そういうふうに端的に答えられるものを持ってきて示す。そして、敬意の法則というものは何かというと、相手との距離を取ることであるというような、そういう解説を少し詳しく第2水準で展開する。

ですから、その第1水準とボールド(太字)になっている問いとを見ていけば、敬語を使うことの趣旨とか、日常生活で困っている問題などについてパッと一応の知識がつかめるといふような、そのような作り方にさせていただけるとよろしいのではないかと。

余り解説を詳しくしますと、解説のところ、肝心の答えはどこにあるのかを探さなければいけない。そういう形ではなくて、2水準に分けたのは大変よろしい、そういうふうに思いました。

○杉戸主査

第1水準、第2水準という御説明ですが、解説案の方、配布資料4の3ページ、4ページに【解説1】、【解説2】と、今はそういう名前ですが、第1段階、第2段階の回答を書いたらどうか、そういう案も考えております。それが具体的な形の案としてこの先も追求すべきである、そういうことだと思います。

大まかに配布資料3から主として御意見を頂き、それは結局、配布資料4の【解説】の書きぶりにも関係する御意見につながるかとは思いますが、まずは配布資料3で問いが37問並んでいます。その範囲、足りない問いはないだろうかというような辺りからいかがでしょうか。

○西原委員

問いが足りないかどうかということではないのですけれども、四角で囲った2 敬語

に関連する問いと3 敬語を用いたコミュニケーションに関連する問いですが、1 敬語の前提に関連する問い、これは分かるんですが、この「2」と「3」がどう違うのかということが、こういうカテゴライゼーションだと分かりにくいかなと思えるんです。じゃあ妙案があるかと言われると、とても困ってしまうのですが…。

「2」はより言語というか、言葉そのものに関連した問いが並んでいて、「3」はより人間関係に着目した問いが並んでいるわけです。「2」は敬語に関する問い、「3」は敬語を用いたコミュニケーションに関する問いという、コミュニケーションという言葉がすごく手あかの付いた言葉なので、全部コミュニケーションじゃないか、そもそも敬語というのはコミュニケーションではないかと言われてしまうと、「2」と「3」の区別がカテゴリーとして、ちょっと分かりにくいかなという気がするんですが…。

○杉戸主査

そういう御指摘だけでもと言うか、そういう御指摘が有り難いので、どうぞお願いします。これは敬語の形の問題と、それを支える気持ちの問題、そして敬語を使ったときの言葉のやり取りの現場、場面の説明、そういうのを意識して分けよう、そういうことだと思っただけです。

○西原委員

むしろそう言っていた方がずっと分かりやすいと思うんです、なぜ分けたのかというときに。

○阿刀田分科会長

「3」というのは敬語の実際の使い方に割と関係しているわけですね。「2」というのは敬語の知識とか歴史とか、つまり敬語というのはよく分からないけれど、こんなふうにも言われてきたとか、知識と言ってしまおうと問題があるのですが、みんなが敬語として考えているものについてのやはり知識なのかな、そういうものにかかわる問いだと言えますね。謙譲語と尊敬語というのがあるようだとか、変なところに「お」は使わない方がいいとかいうような、知識とか歴史とかというものにかかわる問い掛けであり、本質的な差は「2」と「3」は余りないのかもしれないですね。何かうまい言葉で仕分をした方が分かりやすいことは分かりやすいと思いますね。「3」の方は非常に明確で、これは具体例ですよ。

横から口を挟んでしまったんですが、拝見して、まず御苦労様でしたということをお心から申し上げたいというのが一つあります。

次に、大体こんな方向かなということを感じたんですが、ただ90問ぐらいあったものからここまで収められてきたというプロセスが、ワーキンググループではない者には見えないものですから、果たしてこれで大体入ったのかどうかということは、今これだけ見せられても分からないんですよね。だから、相当ゆっくり考えてみないと、これで大丈夫がどうかということはちょっと心配ではあるわけです。

だから、お任せして、実際90問を見せていただいて、それが収められたプロセスを吟味してもしようがないと言えしよがないのかなと思いますが、方向としてはこれでいいだろうなと思うんですけれども、果たしてこれでいろいろな敬語の問題に対して答え得ているかどうかということについては、若干疑問というより、根拠のない不安と言った方がいいかもしれませんが、それはぼんやりと今感じております。

○杉戸主査

ワーキンググループの方でも問いを90から37まで減らすというか、整理していく過程で問いの並び方の体系性と言いましようか、敬語あるいは敬語のコミュニケーションということを考える上で枠組みのようなものを考えて、その枠組みで、例えば、マトリッ

クスのようなものを考えて、その中で漏れなく問題となる事柄は拾えているだろうか、扱い切れているだろうか、そういうことをもちろん意識しながらやっているんです。それを、こういう資料を出すときの補足資料として、こんな見取図で仕事を進めました、そして、この見取図の主なところはカバーできていますというような、そういうことを実際には作業上メモでやっているわけです。そのところをこの先の整理の段階で、これで行こうというときに改めて整理して、こういう範囲を扱っていますということを、これは答申に付けるわけではないと思いますが、参考資料として考えなければいけないだろう、そういうことを今のようなはっきりとした形で発言はしていませんが、問いの体系性、構造という、そういうことを意識していかなければいけない、そういう議論はしております。今の阿刀田分科会長の御意見はそれにつながる話かと伺いました。

○内田委員

先ほどの西原委員の御意見で、確かにそうだなと思ったのですが、むしろ「敬意の法則」、それから「敬語の形」、あるいは「敬意の表し方」、そして3番目に「敬語の使い方」というような、そういう三つに分けて、そしてすべて網羅するのではなく、本当に大事なポイントだけを出すことによって、敬意の法則とかそういうものが分かってくれば応用が利く。あらゆる場面のものを全部辞書のように示すということは、この指針のねらいではないと思います。実際の生活場面で皆さんが使えればいいわけです。このような方針で行かれたらどうかなと思いました。

だから、過不足ではなくて、今のような構造や何か、作業の過程も書いてくださるということで、解説があるということですから、私は項目としてはワーキンググループのお仕事を信頼申し上げたいと思います。

○井田委員

37問が選ばれて、惜しくも選に漏れた次点はどのようなものなのでしょうか。

○蒲谷副主査

先ほどの問題と今のお話と関連するのですが、一つ目は枠で囲ってある「2 敬語に関連する問い」と「3 敬語を用いたコミュニケーションに関連する問い」の違いです。今まで御意見を頂いたところで大体共通すると思うのですが、一番端的には「2」というのは例えば「あちらで伺ってください」という【問8】にあるようなタイプのいわゆる謙讓語と尊敬語を取り違えるような、敬語そのものに密着したような、確かにそれはある意味使い方でもありますし、ある意味、状況も絡むのですが、敬語そのものに密着したような観点のものが「2」に入っている。

「3」の方は例えば褒めていいのかどうかという問題ですね。【問29】に書いてあるような問題であるとか、あと尋ねてよいこと、いけないことはないのかという【問31】のタイプのものは必ずしも敬語そのものの問題ではない。ただし、それは敬語を使った様々な表現、コミュニケーションに関連するというタイプというもので、それが「3」になっているということです。

「2」の敬語に関連する問いの方は今後、お出しするようになる第2章の敬語の仕組みと絡みつつ、しかし第2章の仕組みでは書き切れないようなものを第3章の「2」で扱っていく。要するに、敬語により近いもの、そういうようなイメージで今のところは作ってあります。ただ、今まで頂いた御意見の趣旨はよく理解しております。

それから、最初91問から始まって今37問まで来ているのですが、既に説明もありましたが、落としていったというよりは出されている問いの趣旨の近いものをまとめつつとか、二つが一つになるとか、三つが一つになるという形でまとめていった方向が主なものです。最初に91で出したんですが、それはこれまでワーキンググループだけではなくて小委員会が出たものであるとか、既に資料として配布してあります敬語の使い方

などの資料ですね、その辺りからいろいろ集めまして、趣旨の近いものをまとめたら、90ぐらいあった。それを更にまとめていったというようなことが中心です。

それからもう一つは、ワーキンググループで出た趣旨としては、問いをまとめる形ということとともに、問いを立てているものは、入り口としては具体的な例を使った一つの入り口を作りますが、中の【解説】では、問いとしては立てられなかった項目にも触れつつ、広げていけるような問いにしてあります。だから、問いだけを見ると、この入り口がちょっと狭いとか、ちょっと偏っているという感じを与えるかもしれませんが、例えば3ページの【問19】、「させていただく」というのは最初は三つ四つ異なるタイプの問い掛けで「させていただく」に関連するような問いを立てていたんですが、問い自体を絞り込んで、入り口は一つにしたんですが、【問19】の【解説】の中で「させていただく」に関連して、今まで出てきたような議論を盛り込んだ解説を書いていくという形です。

ですから、入り口はちょっとずつ限定して狭めていきましたが、【解説】そのものの中でその90を生かすような、そういうことを目指している。すべてうまくいくかどうかは分かりませんが、そんなようなことが趣旨です。

確かに削られたというものもあると思います。一つの理由は、それに対してこの文化審議会としての回答というものが示せるかどうか難しいという問い。これも幾つかあると思います。要するにどちらとも本当に言い難くて、解説が非常に書きにくいだろうということで削ったということです。そんなようなものもあることはありましたが、できるだけ削るというよりはまとめていくという姿勢というのがワーキンググループの考え方です。

○杉戸主査

最初、氏原主任国語調査官からの今日の議論のポイントの中に、この見出しのことがありました。見出しについては、先ほど西原委員、内田委員から関連する御発言を頂きました。ワーキンググループの議論を一段階さかのぼりますと、もう少し四角で囲った見出しと、それから囲っていない太字の例えば「1 敬語はどうして必要か」という、そのレベルの見出しと別の表現で案が検討されてきていました。

それはまずはワーキンググループのメンバーだけが分かればいい、そういう作業上の見出しだったわけです。しかし、それはこの先最終的な答申の中では、その答申を読んでいただく様々な立場の方たちのための見出しであるべきだということになりました。それから、答申に目次が付くでしょうから、その目次に何らかの形でこの見出しが並ぶだろう。そういうことも考えなければいけない。

さて、目次のページでこの見出しだけがもし仮に並ぶとしたら分かりやすい見出しになっているか。そんなことも考えなくてはいけない。そんな議論を今しつつあります。今日のところはその中間段階というか、敬語小委員会で議論していただくために分かっていたかきやすいことを一方で考えています。これは、最終的な答申に掲げる見出しとしてどういう形式、そしてどういう表現がいいか。それはこの先更に御意見を頂きながら考えなければいけないものだと思っています。というものなのですが、この見出しについて更に御意見を頂けないでしょうか。

○阿刀田分科会長

結局どういう形の答申にするかという、一番根本のところにかかわってくるような気がします。公的なお役所の答申というのは、我々はある種のイメージがあるわけです。だから逆に、お役所がこんな出すのかというぐらいざっくばらんなもので、ここまで踏み込んで言い切っているのだろうかというようなものも考えられる。何かきちっとした形の、いわゆるお役所の報告書に近いものと、実にざっくばらんに語っているもの、私は実用性があるのだったらざっくばらんでいいのと思うけれども、そこまで踏

み込む度胸があるかどうかということになってくる。

例えば見出しの付け方というのは、私の全く個人的な体験から申し上げるんですが、二通りあると思うんです。その中に含まれているもので一番ティピカル (typical) なものを一つだけ見出しにポーンと挙げてしまって、この見出しにしては漏れているものが随分あるじゃないかというけれども、一番目立つものだけを一つポーンと見出しに上げてしまう方法と全部を網羅するような見出しを立てる方法とがあります。

商業的に本を作る場合には、とにかくティピカルなものを一つポーンと挙げてしまって、こぼれるものがあつたって何だって、これがまず代表なんだということで出すような見出しの立て方と、すっかり学術的に収まっているなという見出しの付け方とある。これはどっちがいいとは一概に言えないんだけど、お役所のものが出すものは後者の方をやるだろうなという気がします。

どんなものをどこまで踏み込んで私たちはこれをやろうとするかということに非常にかかわってくる問題だと思っておりますが、その辺はいかがでしょうか。氏原主任国語調査官、平林国語課長などにもお聞きしたいところですが…。よくもここまで出したなというぐらいの愉快なものを出したら、それはそれで面白いと思うんです。

○平林国語課長

特に制約はないと思うんですが、それは答申の内容の性格によって、ある意味かなり融通無碍にできるのではないかと考えています。文化審議会の答申自体恐らく国の答申の中ではいろいろ工夫はしてきたのではないかと考えています。基本方針の答申の時も呼び掛けの文章とかいろいろ書いたりしていますので、そこは白地に考えていただいても結構ではないかと思えます。

○杉戸主査

今の阿刀田分科会長の一番目立つもの、ティピカルなものを一つだけポーンと抜き出して、それを見出しにする、そういうことを例えば、今日の配布資料3、4で考えたいと思うのですが、それはどういう固まりを考えてのお話だったのでしょか。

例えば配布資料3の最初の【問1】、これは2行半ぐらいの文でできています。これを対象とした見出しを考える場合にとり、そういうサイズのお話でしょか。それとももうちょっと大きな…。

○阿刀田分科会長

ここで言えば、「敬語はなぜ必要か」だけでいいわけですよ。四角囲みの「1」も「敬語はなぜ必要か」という、一番大きな問題だけポーンと出して、【問1】でそれに答えて、それと敬意との関係とかは、見出しそのものがカバーする中にちゃんと入っているかと言えば入っていないんだけど、非常に密接に関係のあることだから、とにかく一番大きな問題だけをポーンと出す。

だから、1 敬語はなぜ必要かのように、一番大きな問題になるものを最初の四角囲みの見出しとして出して、それをもし目次で見たら、それだけ見たら、これだけで全部覆っているのかなと思うぐらいだけれども、とにかく非常に目立つポイントだけが三つポンポンポンと出ているというような見出しの付け方もあり得るだろうとは思っています。そして、後できちつきちと一つずつ詰めていく。

逆に言えば、そういう目立つものを、一つ選んだなということが分かる方がかえっていいと思うんです。そういう方針でこの見出しは付けているんだなということが歴然と分かるような見出しの付け方も、それはとっ付きいいことはとっ付きいいと思います。ただ、全体をカバーしないので学問的ではないなという感じはいたしますが…。

非常に悩ましいところではあります。そのぐらい思い切って踏み込むということも考えられます。

○山内委員

私は、実際にこれが出来上がったら教育に使わせていただこうかなと思っています。そうすると、様々な層の人間が読みますし、逆に今まで堅い感じの構成というものがイメージがありますが、そうではなくてさつきティピカルなおっしゃったように、例えば、「とんでもございません」というのは違うんですよということをまず言って、そうなんだ、それはこういうことなんだというのが読んでいるうちに分かるという書きの方が、使う側としては非常に参考になるというか、使うたびに見出しを見ながらすぐに頭の中にインプットされるかなという気がすごくします。

過去に文化庁が出された本を見ていますと、非常に整然とは書かれているんですが、逆に読む側をそそるような書き方にはちょっと遠いのかなという気がするので、阿刀田分科会長がおっしゃったようにイメージをガラッと変えるような構成にすると印象もいいですし、使う側としても非常に使いやすいなと思います。

ですので、見出しも代表的な間違いやすい言い方をポーンと出して、そこに解説を入れるというやりの方が私たちとしても使いやすいなというふうに事前に頂いた資料を見て感じました。

使う側としては大体網羅されているな、37問の中で網羅されているなと感じましたので、当面この内容で訓練すれば、ある程度美しい日本語が話せるようになるのかなとは思いました。

○蒲谷副主査

関連しつつのことですが、ワーキンググループのこれまでの経緯的なことを含めて、今のお話と絡めて考えてみます。最初は問いの仕方、問い掛け方の調子の問題ですが、できるだけ具体的であるということと、それから「与太郎」を登場させてもいいということがありましたので、調子も4月の段階で出したのは【問1】も、これはちょっと過激な調子で、むしろ「敬語はない方が良いのではないだろうか」と問い掛けたんです。敬語は差別するので良くないのだから、むしろ敬語はない方がいいのではないかという問い掛けにしたのですが、いろいろな話合いの中で、この答申の趣旨は「よりどころのよりどころ」を作ることがありました。ですから、その意味でそのままこれを読んでというのではなくて、例えば、いろいろな敬語の指導書を作るためのよりどころになるような、核になるようなところを示そうというようなことで、そういう調子にちょっとずつ変わってきたというのが一つです。

その「よりどころのよりどころ」ということは、何をここで示さなければいけないかという、考え方ではないかということです。ですから、【問1】がどう考えれば良いのだろうかという問いに変わったのは、ここで書く【解説】は必ずしも明快な答えというだけではなくて、「敬語はどうして必要か」ということに関しては、こんなふうに考えれば良いのであろうということを【解説】で書こうということで、多少問い掛け方が動いてきたという経緯があります。

見出しについても、今とは逆のお話をするようですが、例えば「敬語はどうして必要か」というのも、最初の見出しは「敬語は必要ないのではないか」という見出しを立てていたのですが、それでは余りにも最初から主張が入ってしまっているの、そういう問い掛けではなくて、もうちょっと穏やかに「敬語はどうして必要か」という問い掛けに変わってきたということです。それから、先ほどからお話がありましたが、問いの趣旨としてまとめた見出しと、この配布資料4の【解説】を含めた見出しとで多少性質が異なる。これは面白くない方向に行ってしまうんですが、例えば「敬語の必要性」という形の見出しを立てることによって【問1】は問いも解説もカバーできるというようなタイプの見出しもあり得るのかなと考えています。

ですから、どちらで進めるかということをお話、御意見を頂ければ有り難いと思っ

おります。

○阿刀田分科会長

さっき内田委員でしたか、「どの道、網羅的なことはできないから、幾つかの典型的なものをここで示すんだ」ということですから、その趣旨に立てばかなり見出しなんかも特徴的なものを出してやっていくということも可能なのではないかと思います。

これで学術論文みたいな、敬語の全内容的なものは網羅しましたということを出すということであつたら、また方向は全然違ってくると思いますが、これは一つの典型的な例をここに挙げてあるんだということになれば、おのずと方針も決まってくるのかなと考えています。

○菊地委員

今の点は敬語小委員会で初めの段階で、もう初めは過ぎてはいるんですが、集約しておいていただくことが大事だという気がいたします。

まずワーキンググループの方からお伝えしなければいけないこととして、主査もおっしゃったと思いますが、この37という数が絶対的な値打ちのある数というわけではなくて、今後これは増える可能もあるわけです。

それは今日まだ御覧に入れていない第2章ですが、第2章を書いてみて、その第2章は第2章としての一種の体系性が求められるであろうと思っています。そこに余り細かいことは書けないであろう。そうすると、第2章を書いていく過程で、これは第3章に送るとか、というやり取りが当然出てくるであろうということがあって、37ではなくてもっと増えるということは大いにあり得ることなんです。

それから、90が37になったというのは、この作業はワーキンググループの中でも一部の方が非常に熱心にここまで持ってこられたんです。私も、実は途中から入ったのですが、最初に見たときには、私もさっき阿刀田分科会長がおっしゃったようにこれで十分なのかという印象をちょっと持ちました。

前に1,000という、1,000というのは余り根拠のある数字ではないんですが、全部やったら1,000でも足りないだろうというところから始めて、ある意味でどんどん減らしてきたというところがあります。ただ、最初の立て方も、これは前にワーキンググループで申し上げたのか、ここで申し上げたのか忘れましたが、例えば町があり、縦横10本の通りがあるとします。交差点が100ある。その100にすべてお巡りさんに立ってもらおうというのが本当は一番いいんですが、お金の関係でそうは行かない。そうしたときにお巡りさんをどういうふうに数少ない人数で立ってもらおうと全体の目配りができるかということが多分あるわけです。そういうことを目指して、本当は1,000必要なんだけども幾つ出せば、大体の場合がカバーできるだろう。そこから出発していくというやり方が一つです。

ただ、やはりいつかここでも御議論のあったように、一応調査のようなことをして、膨大なデータを集める時間はないだろうということで、ワーキンググループの何人かの方が取りあえずこんなものでどうだろうというところから始まった。そして、いろいろ経緯を経てここまで来ているのですが、私も途中から入って見て、これで十分なのかという印象を持ったことは確かだし、今も多少はあります。その点で、阿刀田分科会長がそういう印象をお持ちになった、最初の御発言は理解できます。

一方、内田委員の御発言を伺うと、これは網羅するたって土台無理なんだからと、これもそのとおりだと思います。ただ、なるべく多くの場合をカバーして、それを集約していこうという考え方でやっていくのと、考え方を伝えればいいんだから、その程度でいいんじゃないかというのでスタートするのでは、うまく行った場合の行き着く先は同じかもしれないんですが、限られた年月での仕事ですから、ちょっと仕事のやり方が違ってくると思います。簡潔に言いますと、網羅性をできるだけ求めるか、思想を伝え

ればいいかということになります。

思想を伝えるだけならば、ある意味で、第2章だけでもそこそこはできるわけです。この第3章の出発点というのは、具体例をできるだけ示して多くの人を益するということからスタートしているというところもあって、ここへ来てですが、どこがいいかということは伺っておいた方が今後のワーキンググループの作業を進める具体的な場面で結構大事なことになってくるのではないかと今私は感じました。その方向での集約ができたらというのが一つです。

○西原委員

そのことに関連して、この期が出発する時に、一応の申合せのようなことがあったと思うんです。菊地委員はその時には既にいらしたと思うんです。つまり前期の報告書があって、それをもうちょっと具体化しましょうよというか、それが今期の仕事ですよという申合せで具体化とか事例をといるところが至上命令のようにあって今期が始まっているというふうにとらえております。そのとらえ方で行くと、第1章、第2章というのは、それを繰り返すような形で、より敷衍するということが使命でしょうか。そして、第3章は前期の答申になかったものが新たに加わって、より読みやすくというか、具体的にというか、イメージしやすくというか、そういうふうになって、そこが今期の売りというふうに出発したと私はとらえているんですが、それで正しいでしょうか。

○杉戸主査

前期の報告書というのは、旧国語審議会第22期の答申の敬意表現ですね。それとの関係で私なりのとらえ方は今の西原委員の御指摘につながるものですが、今回、今までの議論で認めていただいている第1章、第2章、第3章の構造で言いますと、第1章が形の上でも、内容の上でも22期の答申を引き継ぐ、あるいは再確認するような内容になるだろう。そして、特に22期の答申では、敬語に絞り込んで具体的な敬語の形式、今までの分類ですと、尊敬語とか謙譲語、そういうことは具体的にはほとんど触れていませんでした。そこを今回の第2章で具体的に整理していく、あるいは新しいとらえ方が必要だというようなことを提示する。これも一つの具体性だと思うんです。22期の答申から比べたら具体性が増える。そして、更に場面とか、人間関係を持ち込んで具体的な解説を展開するのが第3章。これは22期からのつながりからすれば、より具体性が増える、そういうつながりになっていくだろう、こんなふうに考えています。

ですから、そのことからすれば今日の第3章の網羅性あるいはより典型的なものだけを端的にということからすれば、これは私の意見が入ってしましますが、網羅的とは言わないまでも、具体例を整理して30前後は挙げた方がいいのではないかと。そんなことをワーキンググループの作業の中では考えて、暗黙の中でそういう数のイメージがある、そういうことなのだなと今改めて思うんです。

これを10に絞ることも一つの方針として掲げればあり得るかもしれませんが、当面90から先ほど蒲谷副主査が補足してくれたように90から60に減らし、40ぐらいに整理してきたという、その段階で触れておきたい事柄、触れておきたい問題、敬語、そういったことは落とせない、落とさない方がいいだろうという、そういうところで残したものがあつたわけです。その結果が今の段階では30ぐらいになっているということです。

○西原委員

菊地委員の問いに関して、今回出た37が十分かということ、そうではないのではないかと。思っているということに関連して、私も、漠然と今回受け取ったことを申し上げてよろしいでしょうか。

今度の答申が出てみると、その裏に込められたメッセージとして敬語とか敬意表現とか立派な言葉遣いというのは、やはり社会人の大人にとって重要なことなのだ、それは

社会生活をする人が共通語を使って行うことなのだというのが裏にあるメッセージとして伝わってくる。

それから、もう一つはもし子供に対してこの答申が利用されるとすれば、それは立派な大人になるのだという、そこを目指すのだみたいなメッセージとして伝わっていくのではないか。つまり、子供同士の間にもこの精神は生きるのだというふうには伝わっていないのではないのかなという、そこら辺りが暗黙のメッセージとしてこういうまとめ方をすると、前提になっていくというところはちょっと心配かなという、過不足ということに関連してはそういう印象を持ちました。

つまり、立派な大人ではない人は敬語は使わないというか、そういうこともちょっとメッセージとして伝わってしまってよいかという疑問は今回の配布資料を拝見して持ちました。ちょっと漠然としていて申し訳ありません。

○阿刀田分科会長

大前提として、今回の答申は敬語を話したいと思っているんだけど、敬語がうまく話せない、そのところに悩んでいるんだという人を対象とするというのが、一つのくくりでもあるわけです。そのくくりで本当に良いかどうかという問題もまたあるような気もするのですが、取りあえずそこまで広げると大変だと思いますので、対象は敬語を話したいと思ったけれどもどうしていいか分からないという人だと思います。

余り子供のことで考えてくるとちょっと難しいかなという気はいたしますね。なかなかできないと思うし、どの道ゆっくり考えると、敬語というのは矛盾だらけで、問い詰めると何を答えても理由はあんまりないところもあるのではないのでしょうか。

開き直って言われたら、別に使わなくていいかなという気もしてきますし、社会習慣ですよ。とにかくこういうものを私たちは使って、今それでコミュニケーションを成立させているわけで、使わないのはなぜいけないのかと言われても、ちょっと困るところは一杯あるような気がいたします。

○井田委員

敬語を話したいんだけどもううまく使えないという、少なからぬ人々に発信するということが、それと、できることならば敬語に関心のない人にもちょっと目を向けてもらって、より円滑なコミュニケーションを取れる社会を目指すと言いますか、菊地委員の先ほどのお言葉で言えば、多くの人に益するということは目指したいし、大切なことだと思います。

そうしますと、とにかく間口の広い、入りやすい読み物でありたいと思います。その上でよく読んでいくとなるほど、かなり敬語に詳しい人にとっても納得できる、腑に落ちるものになる。そういうことで言いますと、資料を頂いた時の私の感じですが、まず「問い」とか、「前提」とか、「関連」とか、学校で使って「ああ嫌だった」という、学校を卒業して一刻も早く「問い」とか「前提」とかという言葉から離れたかったんですよ、学校を出たらこういう問いからは解放されるということが最初からあって、こういう言葉はなるべく使わない方がいいのではないかと。使わない方が読みやすくなるのではないかと思います。

敬語だけは使わないわけには行かない。敬語ですら、「敬語、ああ」と言う。でも、敬語の話なんですから敬語という言葉を使わないわけには行きませんが、それ以外はできるだけ学校臭さというところですが、もう一度勉強しなければならぬのかみたいな思いをしないで読めるものにしたい、そうやってほしいなと思います。

○杉戸主査

用語の問題が出てきました。そちらの方に話を移していきたいと思いますが、先ほどの西原委員の御指摘に関して、立派な社会人、敬語を十分使いたい、使える、そういう

人を特に相手にするという事になってしまうという、そういうことですね。意識するしないにかかわらず、結果的にそういう位置に立ってしまうということは、これは改めて御指摘いただいて気を付けなければいけない点だと思いました。

それから御意見の中に共通語を使ってという、そういうくだりがありました。その点も気を付けなければいけない点だと思っていて、この点はワーキンググループでも時々話題にして、今日の問いの最後のところに方言の問題、【問37】がそうですが、それも第3章でも扱うということは忘れないようにしようと言っているわけです。

申し上げたいのは、西原委員の先ほどの御指摘は、第1章できちんと書くということだと思いました。基本的にこの答申、以下、この答申はどのような姿勢で、どのような目的で書いているのかということも解説的に書かなければいけないものだろうと考えています。誤解あるいは、例えば指摘されたお話ですと子供に向けてここの答申の内容をそのままぶつけていいものではない、そういうつもりではないというようなことは、もしそういうものとしてまとめていくとすれば、そこははっきり書かなければいけないことを思いました。

用語の問題、「問い」とか「関連」という言葉はもう読みたいくないという、そういう御意見なのですが、そういう領域の問題に話を移し替たいと思います。

○佐藤委員

第1章、第2章にどのような言葉の並びがあるのか分からないのですが、今のお話をずっと伺っていて、同じような話を以前にもしたかと思うのですが、敬語を話したいのに話せない人のためのものなのか、私が一番大事だと思うのは、敬語なんか全然気にしていない人に敬語という言葉を使うと、世の中のコミュニケーションがうまく行くぞということを分かってもらえることなんです。そういうようなことは、第1章、第2章に書かれるわけですね。

第3章を今の子供に読ませても駄目ということではないですね。このできたものを、子供に使ってもよろしいということですよ。

後、第3章で具体的という言葉があるのであれば、第3章だけでも熟読すればすべて分かるのか。具体的にという言葉があるのであれば、分からないことを調べるための方法はどのようなのか。言ってみれば索引みたいなものですね。こういうときはどうすればいいのだろうかというのを第3章の索引を調べると、答えにたどり着く書き方になっているのかどうか。考え方とか思想だけを伝えと、具体的に話したいと思っているけれども話せない人というのは、それはそれで思想がもうできているわけですから、思想ができて人に、具体的にこの辺の分からないところはどうすればいいのだろうかという書き方、第1章、第2章、第3章は全く違う文章になるのではないかと思うんです。

話は違いますが、類語辞典というのがいろいろ出ています。元になる言葉が何かで類語を探していくのですが、編集が悪くて非常に使い勝手の悪い類語辞典がたくさんあります。だから、何を調べるためにはどこを調べればいいのかということは、この第3章の中に具体的な言葉としてどこまで挙げるか。100か1,000あったものを30ぐらいにしたときに忘れられてしまった言葉はないだろうか。その言葉を知りたいという人がこの第3章の索引のようなもので、そこにたどり着けるかどうかということも、どこかで考えておいていただくと、第1章、第2章を読まなくても第3章だけ読めば、困ったときに助かるぞという書き方の方がよろしいのではないかと、今思いました。

○杉戸主査

索引ということについては今まで全く考えてきていませんでした。先ほどの見出しをどう工夫するかといったようなことと恐らく話はつながっていくだろうと今伺いながら思っていました、考えたいと思います。

○菊地委員

索引までは考えていなかったのですが、今のお話とか、それ以前の委員の皆さんのお話を伺っていると、先ほどの私の問いは結局、できることならやはりいろいろなケースをカバーしてユーザーフレンドリーなものの方が、ただ思想を伝えるよりはよろしいという方向だと理解すべきだということなのでしょうね。私もそれは賛成です。

また一般の方がこれを見たときに、それを期待すると思っていいたいということでしょうね。そうだとすると、やはり項目の立て方はどこに穴が開いているかなという目で見直さなければならないということにもなるのかなと思って伺っておりました。

○蒲谷副主査

先ほど、これは私の言葉ではありませんが、要するに「よりどころのよりどころ」という趣旨をどこまでここで共有するかによって書き方、書きぶり、様々なものが大きく変わってくるということなのですが、その辺はいかがなものでしょうか。

今のお話は、どちらかと言うとよりどころだというような趣旨の御発言が多いのかなと思ったのですが、「よりどころのよりどころ」という意味は、例えば、あるこういうグループの人たちに向けて、もう一度敬語について説く場合には、それはある意味、別に書かなければいけない。例えば、小学生に向けた敬語のものについては、それは小学生なりにに向けた書き方にやはり変えなければいけないというふうに思うのですが、その辺りはいかがでしょうか。

要するに、「よりどころのよりどころ」という意味はどうしても抽象度は高くなる。ただ、抽象的な理念を書くのではなくて、そこの入り口はできる限り具体的にすることだろうと思うんです。その辺り敬語小委員会としての共通のものがないと、恐らく書き方にすごく影響を及ぼすのかなと思います。

○西原委員

第3章について「よりどころのよりどころ」というのを書こうとすると、とても難しいことになりますよね。挑戦を受ける側としてとても難しいことになるのではないかなと思うんです。つまり第1章や第2章についてそのことを保証するのは比較的簡単というか、書きぶりとしては受けやすいかなと思うのですが、第3章について「よりどころのよりどころ」を示す、しかも具体的な質問が羅列されているというときに、イメージをどうするかというのはすごく難しい。

○蒲谷副主査

一つのイメージは、具体的に「あちらで伺ってください」というようなものを例に出して、そこで述べたいことはいわゆる尊敬語と謙譲語を取り違えるタイプのいろいろな誤りがあるというところに関して、それをどう考えたらいいかという記述がある。それに基づいて、具体的にはそれぞれの各領域において尊敬語と謙譲語を取り違えるような話が様々ある。それは、小学校、中学校のレベルからビジネスの社会からいろいろなところで問題はある。ただ、それは全部を網羅的に書くことはもちろんできませんから、尊敬語と謙譲語の取り違いというのはこういう性質のものであって、これはこういうことなのだというところが、第3章に具体的な例を一応通しながら書かれてはいる。それが「よりどころのよりどころ」というようなイメージなんですね。

もうちょっと言えば、もっと面白い例を出せとか、もっと分かりやすくということは「よりどころのよりどころ」よりも「よりどころ」寄りというような感じがちょっとするんです。それによって書きぶりとか、使う例とか出し方が違ってくるかなというのは作業をしている側としては感じるところです。

○阿刀田分科会長

極めて政策的なことを申し上げますと、ワーキンググループを主査が指導され、菊地委員をはじめとする方々がいると、黙っていても網羅的な方向に必ず行かざるを得ないと思うから、私はむしろこれは不十分なものでいいんだというぐらいのことを思いながら、お進めになっていいのではないかと。

いい加減な人たちが集まっているところに不十分でもいいんですからと言うと、本当に不十分なものが出てきてしまう可能性があるけれども、この顔ぶれを見ているとかなり網羅的に、そして組織的に行こうということが、必ずそれはこびり付いて進められていくだろうと思うので、敬語小委員会としてワーキンググループに託すことはもう少し気楽に持って、不十分なものでいいですと申し上げても、相当網羅的なものが、簡単に言えば今の37ぐらいのところではほぼほぼの都合になっているのではないのでしょうか。「よりどころのよりどころ」と言われてたって、漏れもあるかもしれませんが、とにかく中核的なものはちゃんと出しているのだから、これを見ていただければ「よりどころのよりどころ」にはなるんだという、そのぐらいの気分でおやりになっていただいてもいいのではないかと。

ここでできるだけ網羅的にやってくださいと言うと、本当に網羅的なものが出てきそうな感じがしますので、少し気分を楽に持っていて…。網羅的にやればやるほど読みにくい、一般には非常に辛いものになってくる。これはどう書いたって仕方がないことですね。その辺りを少し度胸よく、気楽に持っていていただいた方がいいかなというのが私の感想です。

○氏原主任国語調査官

「よりどころのよりどころ」という言葉が今話題になっているのですが、これまでの経緯だけ簡単に触れておきたいと思えます。

今日は、今期第1回の敬語小委員会ということで、文化審議会への諮問を参考資料3としてお出ししているのですが、これが我々のスタートラインと言うか、原点なわけです。その理由の第3段落目を読みますと、「敬語が必要だと感じているけれども、現実の運用に際しては困難を感じている人たちに対して、敬語の適切な運用に資する具体的で分かりやすい指針を作成することが必要である」とあります。こういうふうな文部科学大臣から諮問されているわけです。

これを受けて、小委員会でも敬語の適切な運用に資する、具体的で分かりやすい指針の作成に取り組んできたわけです。答申における具体性という問題は、この諮問事項に沿うところから始まっていますので、そもそもここは動かさないとします。

そういう中で現実の運用に際しては困難を感じている人たち、運用をしていく人たちはいろいろな立場の人がいるわけです。以前に「新ことばシリーズ」も配布しておりますし、それから『放送で気になる言葉 敬語編』なども参考としてお配りしておりますが、それぞれの立場でお使いになるわけです。例えば、アナウンサーならアナウンサーであるとか、あるいは教員なら教員であるとか。それぞれに特有のシチュエーションというものがあります。

現実の運用を考えていったとき、いろいろな人たちに共通して問題になるようなものを追求していくと、結局、自分はアナウンサーであるとか、自分は警察官であるとか、そういう個別性、特殊性を捨象せざるを得ない。そういう中から、単に例えばアナウンサーとしてのよりどころを作るとか、警察官としてのよりどころを作るのではなくて、それぞれの場面でだれにでも参考になるような、もう一つ抽象度の高い、別の言い方をすれば、だれにでも役立つような、「よりどころのよりどころ」を作っていくという方向で、もちろん具体性は損なわずにということですが…、それぞれの持っている個性や特殊性を捨象していくという方向が、この敬語小委員会でも確認されて、ずっと「よりどころのよりどころ」という言葉が使われてきているわけです。

ですから、これは今急に出てきた話ではなくて、この敬語小委員会の中での共通認識というか、了解事項となっていますので、必要があれば、もう一度確認することになります。そういう経緯でここまで来ているということは確認しておきたいと思えます。

○大原委員

子供というのをどういうふうにとらめるのか。今の子供世代と私が子供だったころとは随分違ってきているのではないかと思うんです。私は疎開して田舎で育ちましたので、敬語というのは大人になった人が大人社会の中で使うと思っていました。

だから、今の子供たちにとって、幾つまでを子供と考えるかということもあるんですが…、大人社会の中で必要な言葉ではないかと思うんです。敬語というのは。そうすると、さっき出たいわゆる敬語を使いたいけれど使えない大人の人を対象にという方向になってくるのではないかなと思うんです、うまく言えませんが…。

それから方言も随分変わってきていますので、その地域の中で使われる敬語なのか、地域の中での言葉を使つての敬語なのか。それとも、こういういろいろなところへ出た人が方言を使つて、東京なら東京に出てきて、方言で敬語を使うという場面にするのかというようにことでも変わってくるのではないかと思ったんです。

○小池委員

いろいろ御指摘いただいたのを私なりに受け止めた感想を申し上げますと、「よりどころのよりどころ」ということで、確かにこの敬語小委員会の議論はスタートしていましたので、こういう第3章の問い案並びに解説案になってきたということは、御理解いただいていると思えました。

ただ、それをできるだけ性能のいいものにするための提言として、いろいろなことが出てきているというふうに私は思ったんです。根本的に変えろという議論ではなくて、そこに上乘せすると言いましょか…。

確かに、そうだなと思ったのは、佐藤委員がおっしゃった索引の件です。いろいろなケースを統合して一つに煮詰めてありますが、使う側から言うと、例えば謙譲語なのに尊敬語だと思って使ってしまうというのが、これがほとんど不適切な使用例ですから、本当にたくさんあるわけです。その中のどこかに引っ掛かって「よりどころのよりどころ」を見る人のために、そういう具体的なケースを索引として掲げておくことは、これをより性能のいいものにするには一つのいい方法かなと思えました。

例えば、この言い方だったら「1-2」に該当するというふうに、索引上のどこを見るという指示が出ていれば、さっきから話が蒲谷副主査の方からも出ていますが、基本的なとらまえ方というのは、そこへたどり着けば分かってくるわけですから、私の気になっていたところの基本線はここなんだということが分かってくるという意味で、私は索引を付けるということはこれをバージョンアップする意味で、ワーキンググループとしては大変ですが、一つの案かなと思えました。

もう一つはそれとも関連しますが、阿刀田分科会長がおっしゃったことですが、ざっくばらんに、エッというものを掲げたらどうかということについては、私は共感するところが個人的にはあるんです。ただ、受けをねらって、目立つためにそれをやるというのではないのではないか。そうではなくて、恐らく阿刀田分科会長がおっしゃったのは、一般の感覚に近い、一般の人たちが普通に思っているその言葉、気持ちを言語化した、これが見出しになってくるということかなと伺いました。

これはそれを伺いながらチョチョッとメモしたので雑ですから不十分なところがあるんですが、例えば四角囲いの「1 敬語の前提に関連する問い」の下の【問1】だったら、あえて「この時代に敬語は必要なのか」というふうに振ってみるというのは一般の感覚に近いのではないかと思うんです。それを振ることによって大きな変更は私は出ないと思えます。ただ、【解説】のところの書き出しがちょっとアレンジが必要かなと思った

んです、「この時代に敬語は必要なのか」という問いに対する解説としては。恐らく、そういう疑問を持つ人は多いだろう。それは多分上下関係で敬語というものをとらえてしまっているからで、今の時代はむしろそうではなくて、水平の関係で敬語はとらえるんだという解説の導入のところを、エッと思わせるような見出しに対応して調整すればいいことなので、余り本質的には私は変わってこないと思うんです。だから、そういうアレンジメントはしてもいいのかなと私個人としては感じました。

○坂本委員

先ほどからの「よりどころのよりどころ」ということですが、具体的に言いますと配布資料3の最後のページのマニュアル敬語に関する疑問というところを御覧ください。ここでレストランで「御注文の品はおそろいになりましたでしょうか」という例が挙がっていますが、実はマニュアル敬語に関する疑問というので最初の90の段階では三つか四つ立っていたんです。例えば「「いらっしゃいませ、こんにちは」はどうか」とか、そういうのもあったんですが、それをマニュアル敬語は一つでいいのではないか、その中で、これを問いに立てようというような趣旨で立ったわけです。

これで具体的な例が出ると、具体的な回答はどうしてもこの問いに対する回答という形になりますので、これはこうだという回答は出ます。でも、それだけだと本当にただのQ&Aになってしまいますから、ここで言いたいのは何かというと、マニュアル敬語には間違っただけのものもありますよということ。それからマニュアル敬語は自動的に使う、全然考えないで使う、場面とかそういうことを考えないで使う、それが問題ですよということを言うのが、ここでの答えになるのかなと思っているわけです。

ですから、考え方を示すというのはそういうことで、具体性からはある意味で離れてしまう。つまりこの問題に対する答えということではもちろんいろいろ足りない。それだったらこの答えもこの答えもいろいろ欲しいけれども、それは全部載せないで、その考え方を示そう、そういう書き方をしていきたいというような趣旨で、こういうふうになったということがあります。

ですから、減らすということもそういう方向で減らして、答えを書くときに全部網羅できないのだったら、ここで示すのは何かというような考え方で示してきたということが一つあります。

もう一つの問題ですが、さっき西原委員がおっしゃった、このメッセージが社会人の大人にとって重要だというふうに読めるとおっしゃったのは、とても私はショックと言いますか…。敬意表現の考え方の流れから行きますと、大人だけではなくて、もちろん敬語を使いたい人に敬語の使い方を示すというのにはありますが、敬語を使わなくてもいいんですよ。敬語を使うかどうかというよりも考えて、場面に合った、相手に合った、そういう使い方をしていきたいと思いますというのが全体的な流れであると私は考えていますので、これをお読みになって、そういうふうには読んでいただけなかったのかということで、書き方がまずかったかなと思うんです。

ですから、これは子供に対しても使えるものという精神で書きたいと思うんです。つまり、子供は敬語を使わなくても、相手や場面に配慮する言葉遣いはしてほしいということは、全体を流れる調子としてあるといいというふうに思っていますので、それがうまく出ていないとすると、そこももう少し考えて書きたいなというふうに思いました。その辺はいかがでしょうか。

○西原委員

そのことは是非お願いいたしますというか、裏で伝えてしまうメッセージというのは本当に怖いと思いますので、それをにらんでというか、お書きいただくということだけで大分防げるのかなと思う。もっと怖いのはジャーナリズムで、今日はジャーナリストの方がいらっしゃるけれど、これが世の中に問われると新聞で報道されて、見出しが

付きます。その見出しが、例えば、この間の人名用漢字の時も、この答申はこれなんだみたいな見出しが付くと、それで世の中まかり通ってしまうところがあるので、さっき阿刀田分科会長がおっしゃったことは正にそれなんです、アイキャッチなものと、それがアイキャッチになって、それがまかり通っていくという、それをにらんで、むしろ逆手にとって使うというような、ずうずうしさも持ち合わせていただきたいなと思いました。

○内田委員

今、坂本委員がおっしゃってくださったその趣旨、私もすごく賛成です。学者が分類学をやるわけではないわけですし、具体化といったときに問いの立て方は教科書的でと言われたことはあるかもしれませんが、「これってどうするの」みたいな感覚がありますよね。それをキーワードのようにして問いを出し、マニュアル言葉というのはちょっとおかしいのがあるんだよみたいな端的な答えを出しておいて、その後で敬意の表現というのは場面に合った言葉の使い方が問題なのだ、相手や場面に配慮しながら振る舞うこと言葉に表れた一つの表現形式なんだというのが第2水準として解説される。思想と、さっきの「よりどころのよりどころ」は第2水準で示して、端的な答えというのでこれっておかしいんだという、それは欲しいような気がします。

だから、書きぶりとして最初から抽象的に具体性を捨象した形での答えではなくて、まず一つ目の答えは端的に「これは間違い」というようなもの。これはそれこそ使うべきということで、その背景としてもう少し「よりどころのよりどころ」を解説するようにすると分かりやすいのではないか、そんなふうに思っています。今のお考えで作ってくださっていることはとてもいいと思いました。

○菊地委員

坂本委員の第1点に関して感じたことを申し上げて委員の皆さんの御意向を伺いたいと思います。第3章の中には最初の部分の敬語はどうして必要かとか、終わりの方のマニュアル敬語という辺りは、要するに思想を伝えれば、ある意味で事足りる部分なのだろうと思うんです。

ところが、真ん中の具体例が一杯出てくるところが思想を伝えて事足りるかという問題で、それは蒲谷副主査が言われたように尊敬語と謙譲語を間違えるなよとか、謙譲語と尊敬語を続けて使うなよということが趣旨なわけです。それを伝えたいわけです。

そういうときに国語審議会の昔の答申というのは割と抽象的な述べ方をされていて、送り仮名の原則はこうだよ。多少、具体例は示すにしても複合語などについてはそこそこの例を示して、後は適当に考えなさいだったと思うんです。そして、それを受け取った人が親切な本というのはあるもので、それと一般の人をつなぐ用字用語辞典みたいなものがある。思想を伝えれば事足りるというのであれば、「伺ってください」だか何だかを一つ例に出して、こういうのは駄目だよと言えればいいわけです。しかし、ユーザーフレンドリーとなったら、ある意味でおびただし例を出さなければならない。そこがかなり違って来るわけです。

せっかく阿刀田分科会長が適当に手を抜いてもよろしいみたいなことをおっしゃってくださったなら、氏原主任国語調査官が文科大臣の諮問を思い出させてくださったので、さあというところがあるんですが、結局、従来型の思想を伝えればいいでしょうというだけだと、やはり受け取った人には役に立たないと思われてしまう。

そうすると、私は当初は考えてなかったんですが、佐藤委員がおっしゃった索引みたいなことをまじめに考えなければならないのかなとも思うわけです。

ただ、そうすると手を抜いてよろしいとおっしゃった分科会長の御意向がどうかなって思ってしまう。その辺りがワーキンググループとして悩みの種であろうと思いますので、先ほど粗々でもいいので集約的なことを伺えればと申し上げたのは、実はそういう

ことだったわけです。ただ、お話を伺っておりますと思想を伝えればいいという部分だけではない部分が出てくる。例えば、「伺ってください」の例を解説したとき、同じようなものとして、こういうものがございませぬみたいなものを一杯書かなければならないのか。多分書いた方がいいということになるのでしょうか。そうすると、一種索引的なものが必要になってくる。そういうことでよろしいのでしょうか。

それとももうちょっと手前でもよろしいのでしょうかみたいなことを伺った上で作業をした方がいいのではないかと思います。

○井田委員

私は具体例はたくさん挙げていただきたいと思います。解説の中で結構ですが、それが索引に出てくれば、とても親切なものになると思いますし、それは、皆様の御本の中で書かれていることをアレンジする形で…、と言う方は簡単でございますが、実際担当なさる方は大変だとは重々承知しておりますが、でもそうしていただくと有り難いと思います。

それから、マニュアル敬語に関しては、もっと例を一杯挙げて、やっ付けておいた方がいいのではないかと思います。これはパブリックコメントでもがんがん出てきそうなのがしているのですが、よく市川委員から「1,000円からお預かりします」というのは許せないという感じで、この席でも2度ぐらいおっしゃっています。そういうこれだけは許せないというのがそれぞれの人であって、「これだけは許せない集」というのは、別にそれを出せというわけではありませんが、これだけは許せないというものは散りばめておいた方がよりのなじみやすく親切なものになるのではないかと思います。

○阿刀田分科会長

索引ということが出てきて、私もそれはいいなと今だんだん思っております。しかしこの索引がエツと思うぐらい妙な索引、つまり謙譲語とか尊敬語とかそういうことも索引の用語にあるかと思うと、「おばあちゃん」「おじいちゃん」なんていうのもある、「伺ってください」なんていうのもある、あるいは、「御在宅」なんていうのもあるというような、キーワードになるようなものは結構拾ってしましまして、分類のある考え方によって索引の言葉が出ているのではなくて、記憶に残りそうな言葉がポンポンと出てくる。

例えば「御」という字一つだけでも索引になって、「御」が問題になるところに全部行くような索引か何かを作って、索引がきちっとした分類の上でなされていない。とにかく思い出すのに役に立つような索引というのでしょうか、1回読んだ人がこのことはどこで調べたらいいたろうかと思ったとき、索引をパラパラと見ると、ここを見ればきっとそこにたどり着けるのだというような、そのような索引を前提にしながら考えていくと、割と使いやすいものになるかなという気はします。

これはそんなに作業が難しいことではないのではないかと思いますので、こういうものにとって役に立つ索引はどういうものかということをもう1回改めて考え直して付けると、結構面白いかなという気がします。けれどやはり大変なのかな。従来の索引という考え方を少し変えてキーワードをとらえないと駄目かなという気はしますが、そこだけでも相当特徴的なものが出せるかもしれませんね。

○菊地委員

索引を作るというのは、普通の本の場合はまじめにやるとすごく大変な仕事です。本を書く以上に大変なぐらいです。ただ、索引のイメージを皆さんどういうイメージをお持ちなのかも伺っておいた方がいいと思う。

作ると決まったわけではないわけですが、主査や副主査は渋い顔をしていたというので、僕も渋い顔かどうか分かりませんが、佐藤委員に伺いたいのは、索引というの

はどういうイメージなのか、例えば語形だけでもいいのか、つまり「おっしゃる」とか「いらっしゃる」とか、そういうものの使い方が答申のどこに出ているか分からないといったときに使うというものなのかどうか。それだけでいいというなら、ある程度簡単なんですけど…。

○佐藤委員

私が一番欲しいのはたった一言、「だれと話すか」、これだけです。先生に話をするのか、生徒に話をするのか、従業員が客に話すのか、だれと話すのかというのが分かれば、非常に分かりやすいものができると思うんです。同僚同士で話すとき、部下と話すときの丁寧語というのはどの辺まで必要か。刑務所の中で5人入ったときは刑の重い順が偉いのか。そこまではやらなくても、だれと話すかでやると、レストランでのマニュアルみたいなものも索引として大きく分けられるのではないか。

○阿刀田分科会長

そのとき索引の用語はどうしますか。「先生」というので出すんですか。

○佐藤委員

大きくはだれと話すかが分かりやすくなったというような見出しですね、私の頭の中にあるのは。

○阿刀田分科会長

索引の用語はどうしますか。だれと話すかという索引なんですか。

○佐藤委員

先生、生徒、父兄、そういう項目でどんどん入って行って細かく調べていくと最後、自分が知りたいところに行き着くという作り方はどうでしょうか。調べる側としたら、だれと話すか、私はこれだけだと思うんです。

○杉戸主査

つまり索引は本文があって索引なんですね。その本文に今のことを書くかどうかということだと私は思って…。

○佐藤委員

だれと話すかが分からなくなったら見ましょうというのが一つあればいい。

○蒲谷副主査

そちらが大きいんです。索引の作業そのものはそれほど手間がかからないんですが。となると人間関係を明確にした解説を書くという前提がないと。

○佐藤委員

だれと話すかというのが一番大きくて、ここにもありますが、尊敬してもいけないのに尊敬語を使わなければいけないような人と話すときの、むなしさみたいなものを解説としていただく。

○西原委員

佐藤委員がおっしゃるのはそんなに難しいことではなくて、例えば配布資料4の例を見ると、登場人物索引というものを、もし作るとすれば、そこにお父さん、お母さん、おじいさん、おねえさん、お兄さん、社長とかが出てくる。そういうものを後ろで引い

て、社長が出てくるところを見てみよう。お父さん、お母さんが出てくるところを見てみようというふうになればいいのではないのでしょうか。

○蒲谷副主査

趣旨としては解説の中にもできるだけそういうことが入っている方がより多くたどり着ける。

○佐藤委員

お父さんで引いたとき、「外の人に言うときは「お父さん」でなくて「父」と言いましょうね」というところにたどり着けばいい。その方が分かりやすいだろうと思う。

○西原委員

言葉遣いからいうと登場人物索引が、そういう名前でないかもしれないけれど、あればということですね。

○佐藤委員

登場人物索引でかなりのことが…。アメリカの大統領と話す例なんて出さなくていいと思うので。

○蒲谷副主査

恐らく索引はとにかくどこからでもたどり着けるような索引が一つあれば、便利だという趣旨だろうと思いますので、それはもう一つ先の段階として。

○佐藤委員

単語一つずつで調べるという、そこまではやる必要はないと思います。それは国語辞典で調べればいいことですから。

○阿刀田分科会長

本文がきちっとできたら、索引はそんなに難しくはないと思います。登場人物索引でもいいし、それからさっき申し上げたように「謙譲語」とか何とか、非常に重要な用語についての索引も第2章、第3章だけではなくて、第1章も索引で引けるようなものという概念も取り入れたりしながら、だからいろいろなものが入っている索引ということイメージしていただいた方が…。

付けるかどうかはともかく、作業の中でどこかそんなことをお考えいただくとワーキンググループの作業にも少し資することがあるのではないかと思います。

○内田委員

そうするとたどり着く先というのは個別具体ではなくて、「場面に応じて言葉は使わなければいけない。」「相手や場面に配慮しながら振る舞うことが大事だよ。」という原則が身に付けばよろしいわけですね。

○佐藤委員

逆に考えると、人からそう言われたらムっとするというをなくすためには、どうしたらいいか、自分が人をムッとさせない言い方をするにはどうしたらいいかということにたどり着けばいいと思います。

○杉戸主査

繰り返すようですが、そういうことが本文に書かれていないと索引も何もなし。それ

を書くかどうかということも索引の網羅性という本文の方の内容の範囲というか、その課題になっていく。むしろ、そういう御発言として私は考えました。

○内田委員

むしろ坂本委員はそこのところをおっしゃっていたので、そこにたどり着くだろうと思いました。

○杉戸主査

ぼつぼつ時間が気になりますが、先ほど菊地委員からワーキンググループの今後の作業に向けて大きな枠組みというか、考え方を敬語小委員会として、お示しいただければ有り難い、そういうことがありました。その一つの観点が網羅性というか、どういう事柄をどういう体系の中でここまでは扱っていますということの達成度、それをどういうレベルで考えたらいいかということ。これは、恐らく今日の段階でのこの資料、37問という、これだけが具体的な手掛かりですので、これ以上かこれよりもっと少なくていいのかという議論になるのですが、それを阿刀田分科会長が有り難くああいう言い方で言ってくださいました。

私としてはちょうどいい線が見えてくる、そういう御指摘というか、御意向だったと思います。つまり具体的に言えばこの37問というのが一つの目安にもう既にその段階になってきているだろう。そんなふうにワーキンググループのこれまでの経緯を踏まえてそう思います。余り肩に力が入り過ぎていない、そういう線になってきている、そんなふうにも思いますので…。

今日のいろいろな御意見をもう一度ワーキンググループの方で、今日の議事録もできた段階で改めて読み直して、先生方の御意見はこういうことだったのだということを確認することができる、そういう御意見が出たと私は思いますので、そういうことでワーキンググループの方の仕事を続けていきたいと思えます。

後10分ぐらいですが、私の発言としては配布資料3から御意見をとったきり、配布資料4についてお願いしますという言葉はまだ言っていませんが、実質的には配布資料4についても解説の書き方についても、たくさん御意見を頂きましたので、実質、配布資料4の議論も進んだと思えます。改めてこの配布資料4でこの点だけは、つまり【解説】の書き方について、この点だけはこの御意見があれば短い時間ですが、お出しくださいませんか。

○蒲谷副主査

先ほど内田委員が御発言になった解説にある程度段階を設けて、分かりやすくしていくということでもよしいかどうかというところの確認が得られると、書く側としては有り難いのですが…。

○杉戸主査

端的には配布資料4の3ページの先ほども言及しました【問23】について、繰り返し例として出てきているお父さん、お母さんの呼称ですね。それについておじいさん、おばあさんと言うのと祖母、祖父と言うのと、どちらがいいかという問いに対して祖父、祖母と言った方が良く、それを【解説1】でボンと出して、【解説2】で関連して別の親族について書いてある。例えば、そういう構造なんですね。

○蒲谷副主査

それが例えば3段階になって、要するに方向も端的に答えるというのが1に来ます。今は2の方はそれをもうちょっと敷衍するような形ですが、その方向性としてより考へ方に向かう記述と、今のお話ですと、もうちょっと具体例をたくさん出すというような

方向もあります。そうなると解説も3段階になるのかどうか。その辺りはいかがでしょうか。例えば、【解説1】は2, 3行で書く, 【解説2】はその両方の要素が入り込むと相当ごたごたします。理念的な考え方の記述が来たかと思うと、ほかにもこんな例が一杯ありますよという、その辺り、何か御示唆をいただければ有り難いのですが…。

○西原委員

柔軟にお考えになってよろしいのではないのでしょうか。つまりすべての例について3段階の解説があるのではなくて、ここのところはポイントとなるのでというくらいで。

○蒲谷副主査

そういう趣旨を生かして解説を書くということで…。

○西原委員

詳しくは第何章の何ページを見ろみたいな。それだけだって、3段階の解説としては十分です。

○杉戸主査

お話を伺いながら思ったのは、類似例リストというものを適切に付けて、第3段階とおっしゃった、そういうところでも使えるやり方なのかなと。ここで説明したここにはこういう例がよく似た問題としてある。それを説明的ではなく、リストだけ挙げておくということもあっていいのかなと思うのですが…。

○西原委員

具体的にということで、例えば大原委員も佐藤委員もいらっしゃるんですが、関西地方では「お父さん」、「お母さん」はとてもいい敬語ですよ。

○大原委員

田舎でも「お父さん」、「お母さん」と言うのは…。

○西原委員

というような地域差のことですか、そう思っている子供たち、大人たちにとって、この答えはショックでしょう。

○大原委員

だから、社会に出て行ったときにはこういうふうにするものだと子供に、子供というのはどの程度かということはありませんが…。

○西原委員

東京に出て行ったら、「祖父」や「祖母」と言うんだという目安になれば、いいわけですね。

○大原委員

そういうふうになっていけばいいのかなと思いつつ…。

○佐藤委員

青森では「とっちゃん」、「かっちゃん」と呼んでいたのが良くないから先生に言われて、うちに帰って「お父さん」、「お母さん」と呼んだら、「親をばかにするな」って。方言というのは難しい。子供は今度、父、母というのは何だろうと思います。

○大原委員

そういう言葉を使う段階に入るのは清水の舞台から飛び下りるような、そういう気持ちが必要なんですね、大人の言葉を使うというのは…。だから、こういうので勉強していれば、あれはこういうことなのかなという、本を読む子だったら読めるというふうになっていくのかなと思っています。

○内田委員

第2水準は「よりどころのよりどころ」、背景を示していただいて、今の地域差のことを含めてはどうでしょう。そうすれば、もう応用はできますね。

○杉戸主査

もう1点だけ短い時間で恐縮ですが、書きぶりという表現のことでワーキンググループの方で、時々話題になるのが、具体的に申しますと、配布資料4の最初の【問1】の【解説】です。

三つのパラグラフでできています。それぞれのパラグラフの最後のところの言い終わり方ですが、例えば、最初のパラグラフの最後は「基づいていると言えよう。」、二つ目は「言えるのではないだろうか。」、最後が「姿勢が必要なのである。」。これはいろいろな選択肢の中からこういうこと案が出ているわけですが、端的にいかがでしょうか。これも問いの内容によって、あるいは解説の内容によっていろいろだという、これは確かに工夫しなければいけません、全体として例えば、問いの文末は「良いのだろうか。」というので言える場合は、それを工夫しようというふうに、そういうことは工夫したわけですが、これは解説を書く姿勢に関係することなんですね。

○内田委員

最初に書くものほどこうなのだという公式的な見解を示して、最後は読み手が自分で選択できる。判断の余地を残すところで終わった方が良いのではないのでしょうか。

○阿刀田分科会長

できるだけ断定的な方がいいと思いますよね。

○西原委員

解説1は…。

○杉戸主査

なるほど。今の御意見だけでも頂いておけば指針というか、よりどころになります。進行がバランスを欠いていたかもしれません、時間の掛け方について。

今度、直接お目に掛かれるのは7月27日です。ただ、氏原主任国語調査官からも最初に説明があったように、第2章、そして第1章の案ができた段階で、皆様にお送りして御意見を頂きたい。そういうスケジュールで進めてまいりますので、その時にはどうぞ積極的にたくさん御意見をお寄せいただきますようお願いいたします。

○内田委員

メールでも意見を出せるようにしていただけると有り難いと思います。